

第 3 章

子どもの学力・習い事・進路

樋田 大二郎



(1) 経年比較

「ふつうの生活志向」や「どこかの大学でよい志向」が減少し、高学歴、一流大学を志向する傾向が表れている。「ふつうの生活志向」の母親は高学歴志向が弱く、四年制大学以上を希望する割合がおよそ4割にとどまっている。

学力論争の高まりのなかで、小学生・中学生の母親がどのような学力観・勉強観をもつようになったかをみてみよう。

● 「いい大学志向」よりも「ふつうの生活志向」のほうが強い

図3-1-1は、母親の学力観・勉強観の経年での比較を示したものである。最初に07年調査の結果をみると、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」（「いい大学志向」25.5%）よりも「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」（「ふつうの生活志向」47.0%）のほうが強く、割合が2倍近くになっている。

● 「いい大学志向」が増加している

次に同じ図3-1-1で経年での変化をみると、「ふつうの生活志向」は98年調査の58.1%から07年調査の47.0%へと11.1ポイント減少している。

さらに同じような傾向が、「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」という「どこかの大学でよい志向」にもみられる。98年調査と07年調査を比較すると、30.7%から24.7%へと6.0ポイント減少している。

これに対して、「いい大学志向」は98年調査の18.0%から07年調査の25.5%へと7.5ポイント増加している。

以上の傾向をまとめると、「ふつうの生活志向」が相変わらず高い値になっている。しかし、「ふつうの生活志向」や「どこかの大学でよい志向」はこの9年間で減少し、逆に

「いい大学志向」が増加している。母親の間に一流大学を志向する傾向が強まっている様子がうかがえる。

● 「ふつうの生活志向」の母親は高学歴志向が弱い

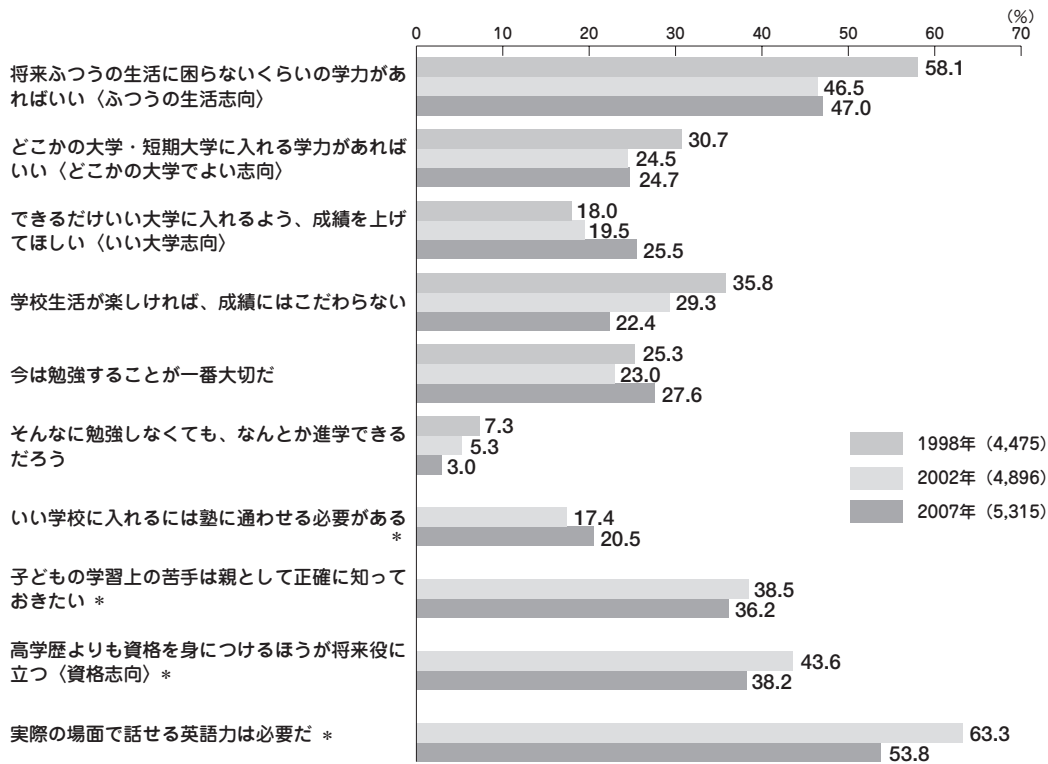
ところで減少しつつある「ふつうの生活志向」の母親は、子どもに対して具体的にどのような学歴を期待しているのだろうか。いったいふつうの生活を可能にする学歴とはどのような学歴なのだろうか。表3-1-1を用いてこのことを確かめよう。最初に「ふつうの生活志向」に「あてはまらない」母親は「中学校・高校まで」が1.5%、「専門学校・各種学校まで」が4.6%、これらを合計して6.1%でしかない。さらに「短期大学まで」の3.6%を合計しても9.7%と1割を切る。このように短大以下までとする割合が低い。これに対して、「四年制大学まで」（71.4%）と「大学院まで」（6.5%）を合計するとおよそ8割に達している。「ふつうの生活志向」に「あてはまらない」母親は高学歴志向が強いことがわかる。

これに対して、「ふつうの生活志向」に「あてはまる」母親は「中学校・高校まで」（17.5%）と「専門学校・各種学校まで」（18.6%）がそれぞれ2割弱である。これに「短期大学まで」（7.0%）を加えると合計43.1%と4割を超えている。また、「四年制大学まで」（38.1%）と「大学院まで」（1.1%）は合計して39.2%と、4割弱にとどまっている。「ふつうの生活志向」の母親はそうでない母親と比べて

四年制大学以上を希望する割合がおおよそ半分のくらい（およそ4割対8割）にとどまってい

る。このことから「ふつうの生活志向」の母親は高学歴志向が弱いといえる。

図3-1-1 学力観・勉強観（経年比較）



注1) 複数回答。
 注2) 小3～中3生の数値。
 注3) *は1998年調査では該当質問項目なし。
 注4) () 内はサンプル数。

表3-1-1 進学期待（全体・「ふつうの生活志向」別）

	あてはまる (3,235)	あてはまらない (3,535)	全体 (6,770)
中学校・高校まで	17.5	1.5	9.1
専門学校・各種学校まで	18.6	4.6	11.3
短期大学まで	7.0	3.6	5.2
四年制大学まで	38.1	71.4	55.5
大学院まで	1.1	6.5	3.9
その他	8.7	5.8	7.2
無答不明	9.1	6.7	7.8

注1) 「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」に該当する（「あてはまる」）かしない（「あてはまらない」）かによる集計。
 注2) 「中学校・高校まで」は「中学校まで」+「高校まで」の％。
 注3) () 内はサンプル数。

(2) 子どもの性別・出生順位別

男子第1子の母親は女子第2子以降の子どもの母親よりも「いい大学志向」が強く、「ふつうの生活志向」が弱い。女子第1子の母親は「どこかの大学でよい志向」が強い。女子第2子以降の母親は「いい大学志向」が弱く、「ふつうの生活志向」と「資格志向」が強い。

図3-1-2で子どもの性別によって母親の学力観・勉強観が異なるかどうかをみてみよう。

小学生では子どもの性別にみた 母親の学力観・勉強観の差が小さい

男子の母親と女子の母親の学力観・勉強観を比較すると、小学生では全体に差異は小さく、5ポイント以上の差があったのは、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい(いい大学志向)」(男子23.9%>女子16.1%、以下同)、「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ(資格志向)」(33.0%<41.0%)の2項目のみであった。

中学生では男子の母親のほうが 「いい大学志向」が強い

しかし、同じ図3-1-2で、中学生では上記の2項目も含めた5項目で5ポイント以上の差異があった。

男子の母親は女子の母親よりも「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」(35.8%>21.3%)と「いい大学志向」が強い。同じ項目の性別間のポイントの差は小学生と比べて2倍近い。また、小学生では差が大きくなかった以下の項目についても、中学生では5ポイント以上の差が出た。女子の母親は男子の母親よりも「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」(40.6%

%<49.9%)や「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」(20.8%<27.0%)の割合が高く、「ふつうの生活志向」や「どこかの大学でよい志向」が強い。さらに、小学生と同じ傾向であるが、女子の母親のほうが「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」(33.9%<44.3%)と、「資格志向」が強い。

男子の第1子で「いい大学志向」が 強く、女子の第2子以降で「ふつうの 生活志向」が強い

母親の学力観・勉強観は一定不変のものではなく、これまでみてきたように時代とともに変わり、子どもの性別でも異なる。それだけでなく次の表3-1-2でみるように、子どもの出生順位でも異なる。一般に、第1子の母親は一流大学への進学を求める傾向がある。

「ふつうの生活志向」(「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」)では女子第2子以降の母親の52.7%に対して、男子第1子の母親は42.5%と10.2ポイント低くなっている。

反対に「いい大学志向」(「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」)は男子第1子の母親が32.8%と3割を超えているのに対して、女子第2子以降の母親はその半分の16.4%にとどまっている。

図3-1-2 学力観・勉強観（学校段階別×性別）

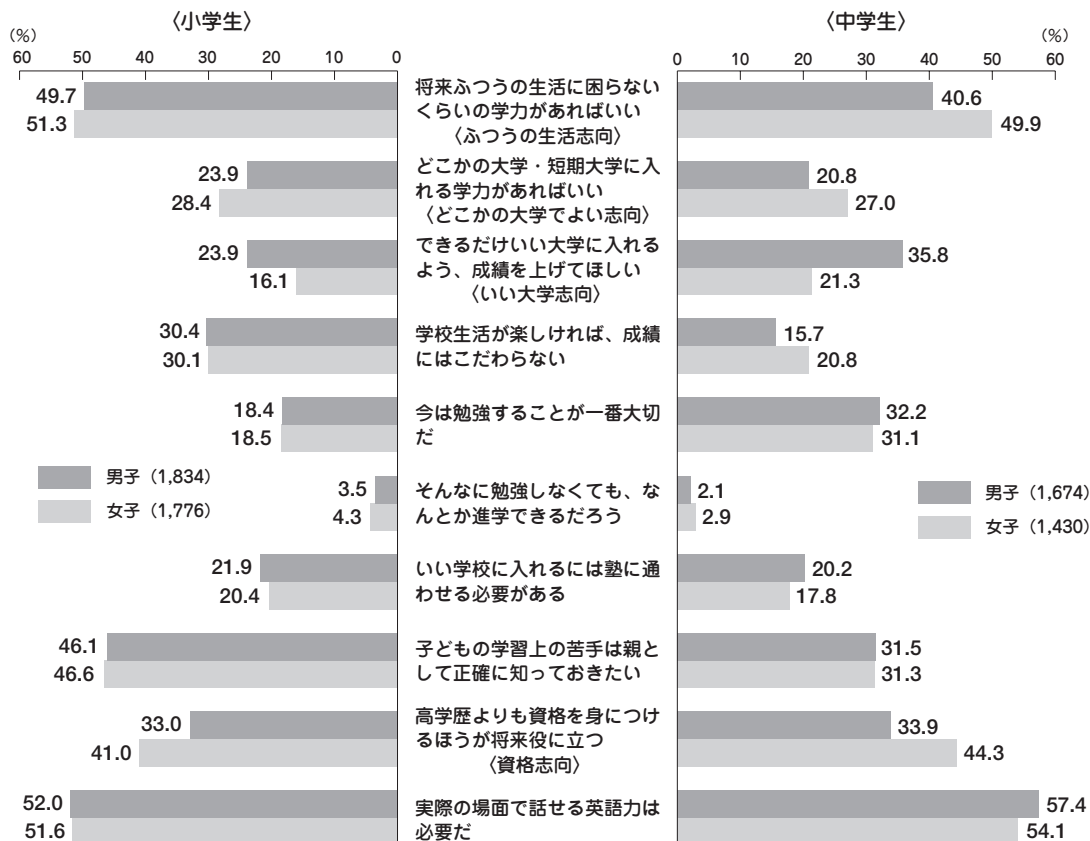


表3-1-2 学力観・勉強観（出生順位別×性別）

	第1子		第2子以降	
	男子 (1,860)	女子 (1,694)	男子 (1,642)	女子 (1,503)
将来ふつうの生活に困らないくらい の学力があればいい （ふつうの生活志向）	42.5	49.0	48.4	52.7
どこかの大学・短期大学に 入れる学力があればいい （どこかの大学でよい志向）	22.6	28.6	22.3	26.7
できるだけいい大学に入れる よう、成績を上げてほしい （いい大学志向）	32.8	20.1	25.9	16.4
学校生活が楽しければ、成績 にはこだわらない	23.3	25.3	23.3	26.9
今は勉強することが一番大切 だ	24.5	24.3	25.6	24.1
そんなに勉強しなくても、な んとか進学できるだろう	3.1	3.0	2.6	4.4
いい学校に入れるには塾に通 わせる必要がある	22.0	19.7	20.0	18.7
子どもの学習上の苦手は親と して正確に知っておきたい	40.8	43.3	37.1	35.8
高学歴よりも資格を身につ けるほうが将来役に立つ （資格志向）	31.3	41.4	35.7	43.6
実際の場面で話せる英語力は 必要だ	57.1	54.5	51.9	50.5

注1) 複数回答。
 注2) 出生順位の第2子以降は第1子以外の子どもをさす。
 注3) () 内はサンプル数。

(3) 母親の属性別

専業主婦の母親は他の母親よりも「いい大学志向」が強い。これに対して常勤の母親は「ふつうの生活志向」が強い。また、生活にゆとりのある家庭はそうでない家庭よりも「いい大学志向」が強い。

母親の属性と学力観・勉強観の関係をみてみよう。

● 専業主婦の母親は他の母親よりも「いい大学志向」が強い

最初の図3-1-3は、母親の就業状況別に学力観・勉強観をみた結果を示している。就業状況により学力観・勉強観が大きく異なっている。

専業主婦の母親は他の母親よりも「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」（専業主婦26.5%、パートやフリー24.5%、常勤20.8%、以下同）と答えており、「いい大学志向」が強い。また「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」（22.4%、20.4%、17.0%）、「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」（44.9%、38.4%、33.8%）などと、いい成績を取らせる方法にも関心が高い。

これに対して常勤の母親は、「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」（44.0%、49.6%、51.7%）と「ふつうの生活志向」が高く、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」（23.4%、23.4%、30.6%）と答える割合も高い。

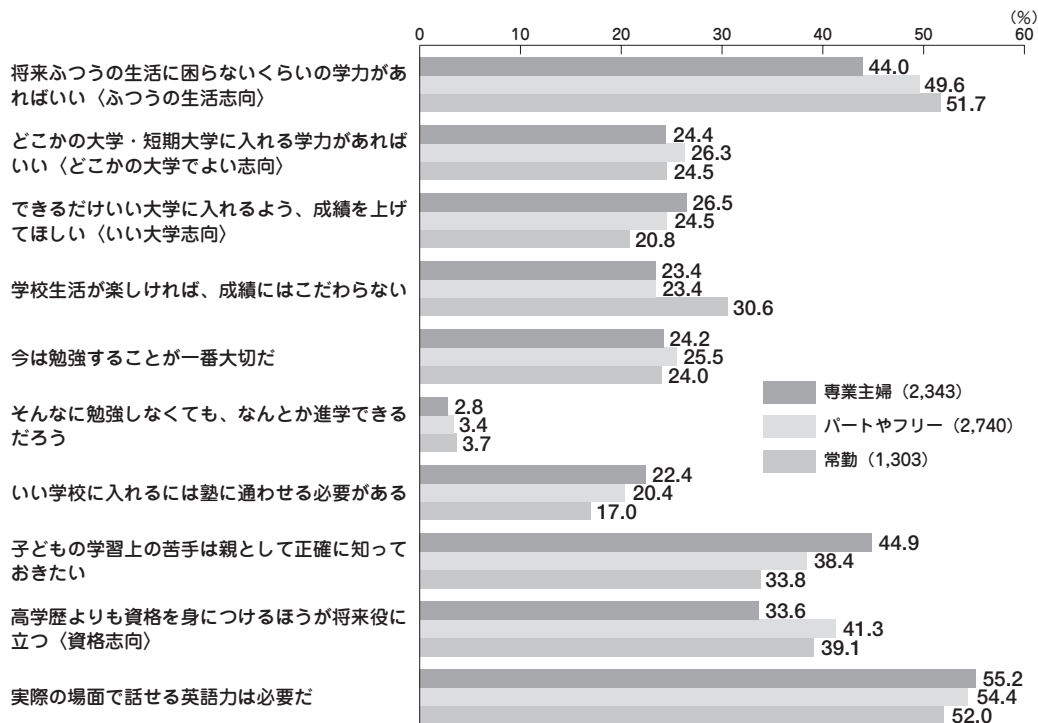
パートやフリーの母親は、「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」（33.6%、41.3%、39.1%）の割合がやや高くなっている。

● 「非大卒・非短大卒」の母親は「大卒・短大卒」の母親よりも「ふつうの生活志向」や「資格志向」が強い

次に図3-1-4は母親の学歴別に学力観・勉強観をみた結果である。「大卒・短大卒」の母親は「非大卒・非短大卒」の母親よりも「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」（「大卒・短大卒」36.5%、「非大卒・非短大卒」14.3%、以下同）と答える割合が高く、「いい大学志向」が強いといえる。そして「今は勉強することが一番大切だ」（28.5%、21.6%）と考えている。そして、そのためには「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」（25.4%、15.9%）と考え、「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」（44.6%、35.0%）とも考えている。

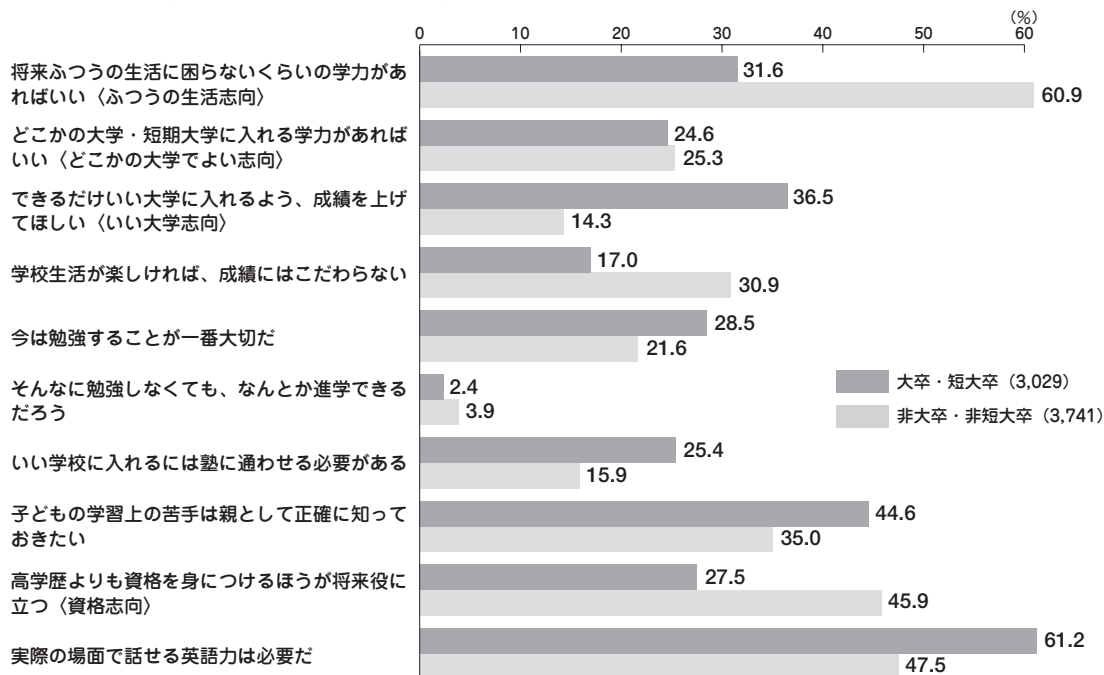
これに対して、「非大卒・非短大卒」の母親は「大卒・短大卒」の母親よりも「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」（31.6%、60.9%）と、「ふつうの生活志向」が強く、「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」（27.5%、45.9%）と「資格志向」も強い。「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」（17.0%、30.9%）と答える割合も高い。

図3-1-3 学力観・勉強観（就業状況別）



注）（ ）内はサンプル数。

図3-1-4 学力観・勉強観（母親の学歴別）



注1）母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とした。

注2）（ ）内はサンプル数。

● 生活にゆとりのある家庭はそうでない 家庭よりも「いい大学志向」が強い

最後に表3-1-3で生活のゆとり別に学力観・勉強観をみてみよう。近年では、家庭の経済的背景による教育格差が社会問題視されている。本調査では、家庭の経済的生活のゆとりと母親の学力観・勉強観に関連性があるという結果が出た。

表3-1-3では生活のゆとりを4段階で表しているが、ここでの分析では簡略化のため、「ゆとりがある」と「ゆとりがない」の2つに着目して検討する。

ゆとりのない家庭はゆとりのある家庭よりも「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」（「ゆとりがある」31.2%、「ゆとりがない」60.7%、以下同）と答えており、「ふつうの生活志向」が強い。また「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」（23.9%、52.6%）と答える割合が高く、「資格志向」も強い。さらに「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」（19.3%、

29.8%）と答える割合も高い。また、ここまでの回答傾向は前述の「非大卒・非短大卒」の母親と同じではあるが、「非大卒・非短大卒」の場合と異なり、ゆとりのない家庭はゆとりのある家庭よりも「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」（18.6%、23.8%）と「どこかの大学でよい志向」が強いのが特徴となっている。

これらに対して、ゆとりのある家庭はそうでない家庭よりも「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」（37.2%、16.3%）と「いい大学志向」が強く、そのためには「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」（29.2%、17.9%）、「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」（41.1%、33.0%）としている。また「今は勉強することが一番大切だ」（33.8%、24.0%）という回答も多い。

この調査結果は、家庭の経済状況と母親の学力や勉強についての考え方に強い関係があることを示しているといえるであろう。

表3-1-3 学力観・勉強観（生活のゆとり別）

	(%)			
	ゆとりがある (414)	多少はゆとりがある (2,796)	あまりゆとりがない (2,424)	ゆとりがない (755)
将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい 〈ふつうの生活志向〉	31.2	42.7	53.3	60.7
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい 〈どこかの大学でよい志向〉	18.6	24.4	27.4	23.8
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい 〈いい大学志向〉	37.2	28.8	20.0	16.3
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	19.3	22.5	27.5	29.8
今は勉強することが一番大切だ	33.8	25.8	22.3	24.0
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	3.1	2.9	3.6	3.6
いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある	29.2	21.3	18.4	17.9
子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい	41.1	41.1	40.2	33.0
高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ 〈資格志向〉	23.9	32.1	42.7	52.6
実際の場面で話せる英語力は必要だ	58.0	57.3	51.2	48.7

注1) 複数回答。

注2) 生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に対する回答別に集計。

注3) () 内はサンプル数。

四年制大学と大学院への進学期待は、男子69.4%、女子48.4%と性差がある。母親の学歴別では「非大卒・非短大卒」44.2%、「大卒・短大卒」78.1%で、30ポイント以上「大卒・短大卒」の母親のほうが高い。生活のゆとり別では、「ゆとりがある」は76.3%に対して「ゆとりがない」は40.5%で大きな差がある。

● 四年制大学・大学院への進学期待は 男子は69.4%、女子は48.4%

図3-2-1は、全体および子どもの性別に母親の進学期待をまとめたものである。

全体からみると、「中学校・高校まで」が9.1%、「専門学校・各種学校まで」が11.3%、「短期大学まで」が5.2%であり、ここまでを合わせて25.6%である。これに対して「四年制大学まで」が55.5%、「大学院まで」が3.9%であり、これらを合計すると59.4%と全体の6割程度に達する。

進学期待は子どもの性別で大きく異なる。女子は「四年制大学まで」が46.2%と男子の63.9%と比べ17.7ポイント低くなっている。女子の「大学院まで」は2.2%であり、これらを合計しても48.4%にとどまり、男子の場合の合計69.4%よりも21.0ポイント低い。「専門学校・各種学校まで」では、女子の母親の割合が男子の母親の割合よりも高く（男子8.6%＜女子14.3%）、「短期大学まで」も同様であった（男子0.4%＜女子10.6%）。

● 四年制大学以上は母親が「非大卒・非短大卒」だと44.2%、「大卒・短大卒」だと78.1%になる

母親の学歴と子どもへの進学期待との関係はどのようになっているだろうか。図3-2-2で母親の学歴別に進学期待をみてみよう。

「中学校・高校まで」（「非大卒・非短大卒」14.9%＞「大卒・短大卒」1.9%、以下同）、「専門学校・各種学校まで」（17.7%＞3.4%）、「短期大学まで」（6.4%＞3.7%）と短期大学

以下を合計すると「非大卒・非短大卒」は39.0%、「大卒・短大卒」は9.0%になる。これに対して、子どもに四年制大学以上の学歴を期待する割合は「四年制大学まで」（42.7%＜71.2%）と「大学院まで」（1.5%＜6.9%）を合計すると、「非大卒・非短大卒」は44.2%、「大卒・短大卒」は78.1%になる。「大卒・短大卒」の母親は「非大卒・非短大卒」の母親よりも子どもに高学歴を期待している。

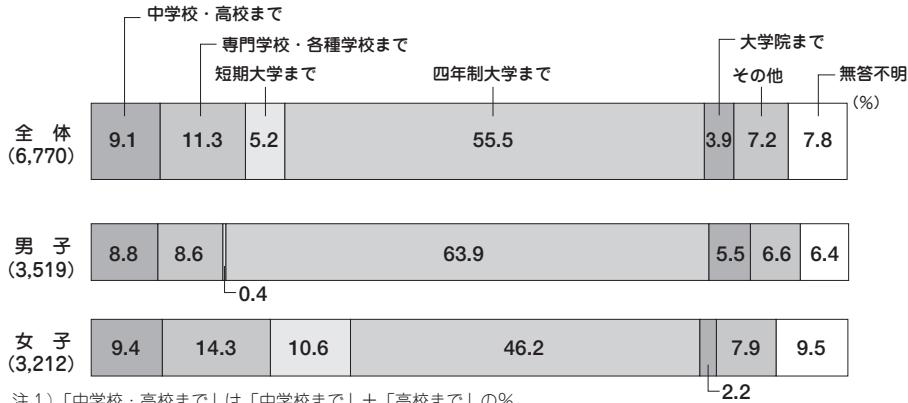
● 四年制大学以上は「ゆとりがある」 家庭は76.3%に対し、「ゆとりがない」 家庭は40.5%にとどまる

「格差社会」という言葉がよくいわれる。「格差」のとらえ方はさまざまであるが、ここでは生活の経済的なゆとりに焦点をあて、生活のゆとりと進学期待との関連をみてみよう（表3-2-1）。

「四年制大学まで」と「大学院まで」を合計すると、「ゆとりがある」と回答した母親は76.3%、「多少はゆとりがある」も67.4%に対し、「あまりゆとりがない」は53.8%と5割強、「ゆとりがない」は40.5%とおよそ4割となっている。

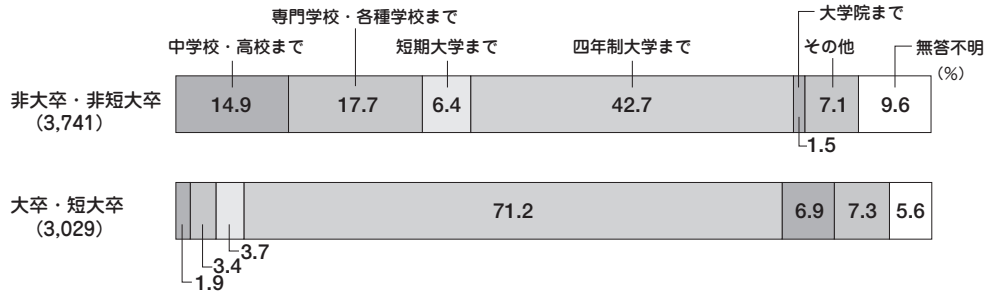
また「ゆとりがある」と回答した母親は「大学院まで」が13.0%と1割を超えているのも特徴である。これに対して、「ゆとりがない」と回答した母親は「中学校・高校まで」が19.5%と高くなっている。家庭の経済的な生活のゆとりと子どもの進学に対する期待には関連があることを示す結果となった。

図3-2-1 進学期待（全体・性別）



注1)「中学校・高校まで」は「中学校まで」+「高校まで」の%。
 注2)「全体」には性別が不明の者も含まれる。
 注3) () 内はサンプル数。

図3-2-2 進学期待（母親の学歴別）



注1)「中学校・高校まで」は「中学校まで」+「高校まで」の%。
 注2) 母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とした。
 注3) () 内はサンプル数。

表3-2-1 進学期待（生活のゆとり別）

	(%)			
	ゆとりがある (414)	多少はゆとりがある (2,796)	あまりゆとりがない (2,424)	ゆとりがない (755)
中学校・高校まで	4.3	5.6	10.7	19.5
専門学校・各種学校まで	2.9	9.0	14.5	15.5
短期大学まで	2.2	4.4	6.6	5.3
四年制大学まで	63.3	63.2	51.4	37.9
大学院まで	13.0	4.2	2.4	2.6
その他	8.5	7.1	6.6	9.4
無答不明	5.8	6.5	7.8	9.8

注1)「中学校・高校まで」は「中学校まで」+「高校まで」の%。
 注2) 生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に対する回答別に集計。
 注3) () 内はサンプル数。

(1) 学年別、経年比較、性別

中学受験を「させる」割合は、98年調査では17.6%であったが、07年調査では25.2%にまで増加している。また中学受験を「させる」とする母親の割合は、小4生の19.8%から小5生で23.8%に増える。性別による差は少ない。

● 中学受験を「させる」母親は小5生が23.8%、小6生が26.6%である

中学受験の希望をたずねた結果を学年別に示したのが図3-3-1である。

学年別の中学受験を「させる」割合をみると、小1生16.6%、小2生15.1%、小3生18.8%、小4生19.8%とここまでが2割以下だったのが、小5生で2割を超え23.8%、そして小6生はさらに増加し26.6%となっている。

次に、「まだ決めていない」をみると、小1生34.6%、小2生33.0%、小3生28.7%とここまでは3割前後となっている。小3生までは母親が受験をさせるかどうか迷っている様子がうかがえる。しかし、子どもが小4生になると母親は受験をさせるかさせないかを決め始め、「まだ決めていない」は小4生で23.4%、そして小5生が16.6%、小6生が7.0%となっている。これらの結果、小6生の段階では受験を「させる」が26.6%、「させない」が64.6%、「まだ決めていない」が7.0%となっている。このような学年による数値の動きは、小4生の2月から始まる大手受験塾の受験対策と関連があると推測できる。

なお、今回の調査では、私立小学校の児童の割合は10.7%で、調査を実施した4都県の実際の平均値(2.4%*)と比べ高い。さらに調査サンプルで、私立小学校児童の母親が中学受験を「させる」と回答した割合(85.5%)

は、公立小学校児童の母親(11.6%)の場合よりかなり高い。この結果、中学受験を「させる」割合が高めに表れていることに留意していただきたい。

● 中学受験を「させる」母親は、98年調査が17.6%、02年調査は19.5%、07年調査は25.2%と上昇している

図3-3-2は中学受験希望の割合を経年比較で示している。なおこの図では全学年ではなく、先述のように受験予定が明確になってくる小5生と小6生の母親をサンプルとしている。

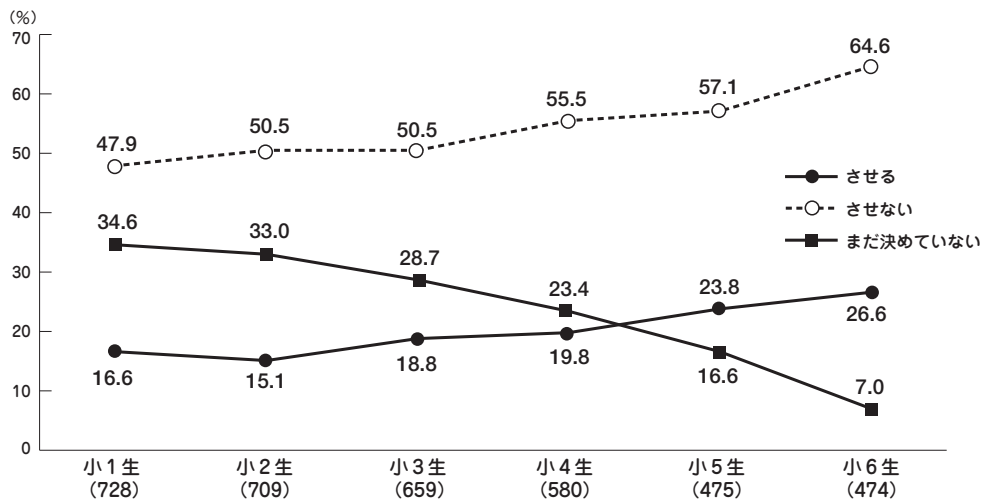
受験を「させる」の割合の経年変化をみると、98年調査が17.6%であったのが、02年調査では19.5%、07年調査では25.2%と9年間で7.6ポイント増加している。また、「まだ決めていない」の割合が98年調査が5.9%、02年調査が9.6%、07年調査が11.8%と増加している。本調査の対象である首都圏では中学受験が増加傾向にある。

● 性別では差が少ない

最後に表3-3-1で性別にみても、受験を「させる」にはあまり差がない(男子25.0%、女子25.3%)。しかし「まだ決めていない」の割合は男子が女子と比べて若干高い(男子13.6%、女子10.0%)。

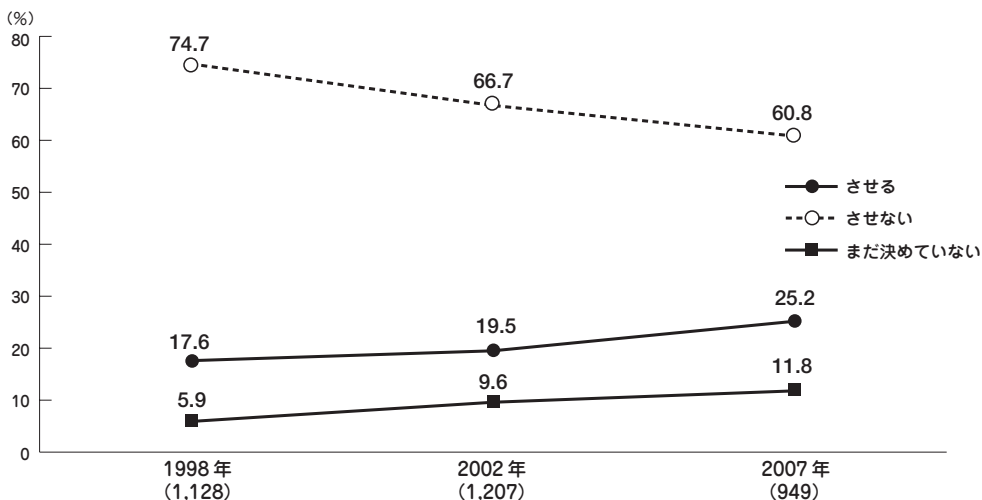
* 調査を実施した東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県の平成19年度学校基本調査の結果によると、私立学校に通学する小学生の割合はそれぞれ、東京都4.6%、埼玉県0.4%、神奈川県2.2%、千葉県1.0%であった。4都県の平均値2.4%はこれらの数値の平均である。

図3-3-1 中学受験の希望（学年別）



注) () 内はサンプル数。

図3-3-2 中学受験の希望（経年比較）



注1) 小5～小6生の数値。
注2) () 内はサンプル数。

表3-3-1 中学受験の希望（性別）

	男子 (464)	女子 (482)
させる	25.0	25.3
させない	59.1	62.9
まだ決めていない	13.6	10.0
無答不明	2.4	1.9

注1) 小5～小6生の数値。
注2) () 内はサンプル数。

(2) 進学期待別、塾や習い事の様子

「いい大学志向あり」の母親のうち44.6%、「いい大学志向なし」の母親のうち20.4%が中学受験を「させる」としている。また、子どもに高学歴を望む母親の間でも中学受験を「させる」割合が高くなっている。

「いい大学志向あり」の母親の44.6%が受験を「させる」と回答

どのような母親が子どもに中学受験をさせるのだろうか。このことをみたのが図3-3-3である。ここでは学力観・勉強観について「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」を選択した母親を「いい大学志向あり」、選択しなかった母親を「いい大学志向なし」とする。また、この図では、受験への態度が明確になってきている小5生と小6生の母親をサンプルにしている。

「いい大学志向あり」の母親の44.6%が受験を「させる」と答えている。また、14.0%が「まだ決めていない」と答え、「させない」と答えたのは39.8%、およそ4割にとどまっている。

これに対して、「いい大学志向なし」の母親は、受験を「させる」が20.4%と「いい大学志向あり」の母親のおよそ半分にとどまる。そして、「まだ決めていない」が11.3%であった。「させない」と答えたのは65.9%におよび、「いい大学志向あり」の母親よりも26.1ポイントも高くなっている。

以上のように、子どもにいい大学への進学を望む「いい大学志向あり」の母親は「いい大学志向なし」の母親と比べ、中学受験志向が非常に強いといえる。

子どもに高い学歴を望む母親の間でも受験させる傾向がある

つづいて表3-3-2で、中学受験の希望と進学期待との関係のみてみよう。この図も小5生と小6生のみをサンプルとしている。「中学校・高校まで」「専門学校・各種学校まで」「短期大学まで」を希望する母親は中学受験を「させる」割合が低く、いずれも5%

未満になっている。しかし、「四年制大学まで」は36.7%、「大学院まで」は64.9%となっている。子どもに高学歴を希望する母親は、そうでない母親よりも中学受験志向が強いことがわかる。「いい大学志向あり」の母親だけでなく、子どもに高学歴を望む母親でも、公立中学校離れが進んでいる様子うかがえる。

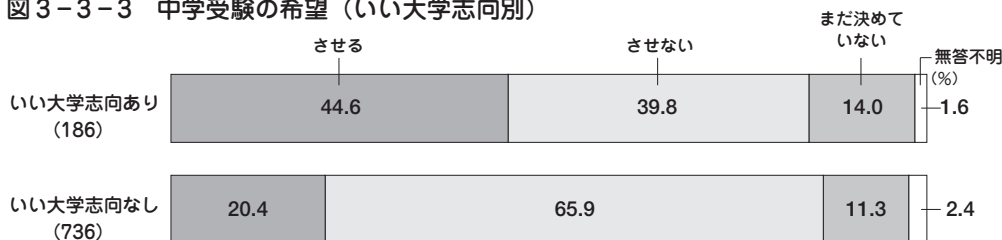
受験させる家庭では小4生以降に「学習系の習い事」が増える

次に視点を変えて、図3-3-4で中学受験を「させる」と回答した母親に限定して、子どもが利用している学習系の習い事をみてみよう。中学受験準備は小学校での勉強だけでは不足である。そのため、子どもたちは学校外の塾や習い事で中学受験対策の勉強をせざるを得ない。

図3-3-4で「学習系の習い事全体」からみると、小1生60.3%、小2生60.7%、小3生62.9%とここまではおよそ6割の値になっている。しかし、小4生81.7%、小5生88.5%、小6生84.1%と小4生以降は8割台に増加する。注目したいのは、個々の塾や習い事ごとにみた学年別変化である。「計算・書きとりなどのプリント教材教室」と「定期的に教材が届く通信教育」は小学校低学年がピークで学年が上がるとおおむね減っていく。これに対して「受験のための塾」は小1生が10.7%、小2生が14.0%、小3生が25.0%と徐々に増加していたが、小4生から66.1%と急激に増加する。そして小5生で83.2%とピークになり、小6生で75.4%となっている。中学受験準備はおおむね小4生くらいからスタートしていると推測される。

なお、「家庭教師」は小6生がもっとも高く10.3%である。

図3-3-3 中学受験の希望（いい大学志向別）



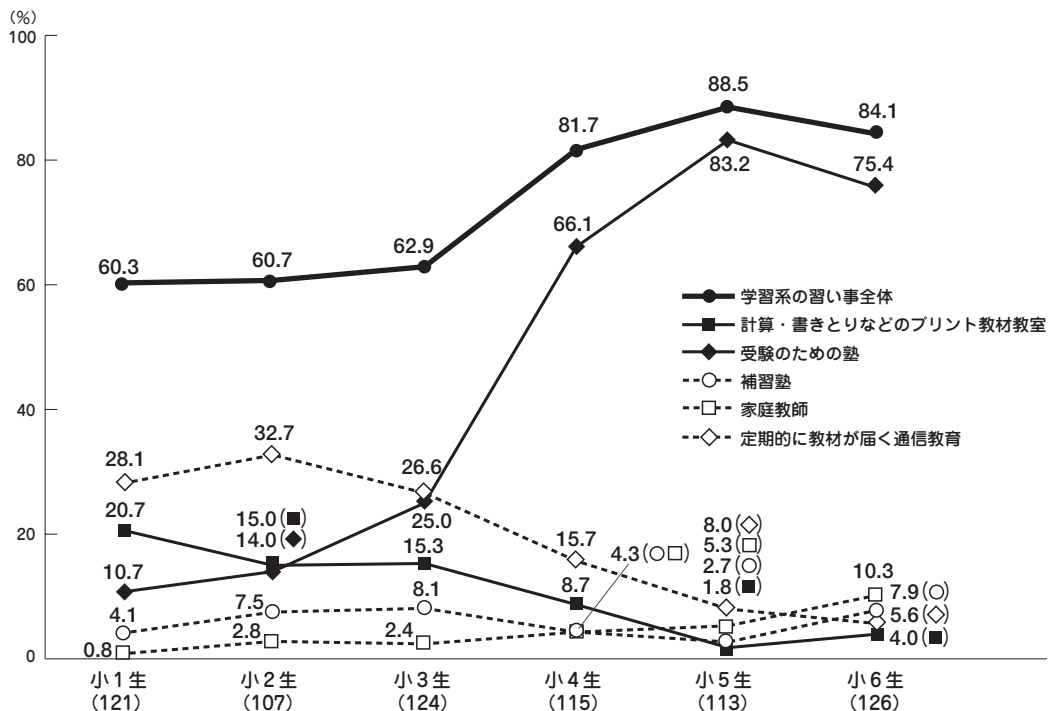
注1) 小5～小6生の数値。
 注2) 「いい大学志向あり」は、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」に「あてはまる」と回答した者、「いい大学志向なし」は回答しなかった者。
 注3) () 内はサンプル数。

表3-3-2 中学受験の希望（全体・進学期待別）

	中学校・高校まで (96)	専門学校・各種学校まで (126)	短期大学まで (53)	四年制大学まで (501)	大学院まで (37)	その他 (62)	無答不明 (74)	全体 (949)
させる	4.2	2.4	1.9	36.7	64.9	21.0	13.5	25.2
させない	85.4	88.9	81.1	49.5	10.8	66.1	63.5	60.8
まだ決めていない	9.4	7.1	15.1	12.4	21.6	11.3	12.2	11.8
無答不明	1.0	1.6	1.9	1.4	2.7	1.6	10.8	2.2

注1) 小5～小6生の数値。
 注2) 「中学校・高校まで」は「中学校まで」+「高校まで」の%。
 注3) () 内はサンプル数。

図3-3-4 中学受験希望者が利用している学習系の習い事（学年別）



注1) 複数回答。
 注2) 中学受験を「させる」と回答した者のみの数値。
 注3) 「学習系の習い事全体」は現在利用している塾や習い事として「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「受験のための塾」「補習塾」「家庭教師」「定期的に教材が届く通信教育」から最低1つを選択した%。
 注4) () 内はサンプル数。

(1) 今現在利用しているもの

塾や習い事の利用は、小3生がピークで、小3生の84.1%が何らかの塾や習い事をしている。小学生では複数利用の割合がおよそ6割に達している。「スポーツ系」の習い事は小2～小3生のころがピーク。「学習系」は中3生(59.3%)がピーク。

● 73.3%が塾や習い事を利用している

最初に、子どもたちはどのくらいの割合で塾や習い事を利用しているのかをみてみたい。表3-4-1は、今回の調査結果から現在利用している塾や習い事の状況を学年別に示したものである。

この表によると、小1～中3生全体では調査時点で73.3%が塾や習い事を利用している。小1生(80.5%)と小2生(81.2%)で8割強、小3生が84.1%でもっとも高くなる。その後、小4生が83.8%、小5生が81.7%、小6生が78.7%となるが、中1生で59.4%と大きく下がる。しかし、中2生62.4%、中3生69.2%と再び増加する。

● 小学生では複数利用の割合がおよそ6割に達している

同じ表で注目したいのは現在利用している塾や習い事の数で、小学生では各学年とも「1個」だけという子どもはむしろ少数派で、2個以上利用している複数利用の割合が5～6割である。小学生で複数の塾や習い事を利

用している割合がもっとも少ないのは小6生で49.8%、もっとも多いのは小3生で63.9%である。中学生では複数の塾や習い事を利用している割合は小学生の半分程度の2割台にとどまる。

● 「スポーツ系」の習い事は小2～小3生のころがピークになり、その後学年が上がるにつれて減少していく

次に、表3-4-2で学年別に現在利用している塾や習い事のタイプがどのように変化するかをみてみよう。

最初に「スポーツ系」の習い事は小1生(52.1%)がおよそ5割、そして小2生(55.9%)と小3生(55.5%)のころがピークで、その後は減少に転じている。小4生では50.2%に減少し、中学受験組が勉強が忙しくなる小5生(46.1%)、小6生(34.4%)はさらに減少する。そして中学校で部活動が始まると、中1生(9.8%)、中2生(10.8%)、中3生(7.0%)とも1割前後まで少なくなる。

表3-4-1 現在利用している塾や習い事とその個数（全体・学年別）

	(%)									
	小1生 (728)	小2生 (709)	小3生 (659)	小4生 (580)	小5生 (475)	小6生 (474)	中1生 (1,094)	中2生 (1,000)	中3生 (1,033)	全体 (6,770)
現在利用している	80.5	81.2	84.1	83.8	81.7	78.7	59.4	62.4	69.2	73.3
1 個	26.0	21.4	20.2	23.8	21.5	28.9	33.2	36.8	47.0	30.6
2 個	26.5	29.3	25.5	27.9	32.0	27.6	18.9	17.6	17.2	23.3
3個以上	28.0	30.5	38.4	32.1	28.2	22.2	7.3	8.0	5.0	19.4

注1)「現在利用している」は18種類の塾や習い事のうち、1つ以上に○をつけた割合を示す。

注2)学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親も含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注3)「全体」には学年が不明の者も含まれる。

注4)（ ）内はサンプル数。

表3-4-2 現在利用している塾や習い事のタイプ（学年別）

	(%)									
	小1生 (728)	小2生 (709)	小3生 (659)	小4生 (580)	小5生 (475)	小6生 (474)	中1生 (1,094)	中2生 (1,000)	中3生 (1,033)	
スポーツ系	52.1	55.9	55.5	50.2	46.1	34.4	9.8	10.8	7.0	
学習系	40.0	39.6	46.9	49.3	55.2	55.7	47.3	51.5	59.3	
芸術系	27.3	29.8	30.7	26.2	23.6	23.0	13.7	13.3	10.5	

注1)複数回答。

注2)「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から最低1つを選択した%。「学習系」は「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「受験のための塾」「補習塾」「家庭教師」「定期的に教材が届く通信教育」から最低1つを選択した%。「芸術系」は「バレエ・リトミック」「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から最低1つを選択した%。

注3)学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親も含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注4)（ ）内はサンプル数。

● 「学習系」は受験準備の影響を強く受ける

「学習系」の習い事は受験準備の影響を強く受ける。小1生（40.0%）と小2生（39.6%）が4割前後である。そのあと徐々に増加し、小学校中学年では小3生（46.9%）、小4生（49.3%）が5割弱、そして小5生（55.2%）、小6生（55.7%）と小学校高学年で5割を超える。中1生（47.3%）でいったん減少し、中2生（51.5%）、中3生（59.3%）と再び増加する（表3-4-2）。小学校高学年と中3生で割合が高いのは受験準備の影響であると推測できるが、小1生で4割、中1生で5割弱と受験準備まで時間がある学年でも低くないのが特徴である。

最後に「芸術系」の習い事は、学年あるい

は受験準備の影響を受けにくいのが特徴である。小3生（30.7%）で利用する割合がもっとも高いが、小学校6年間を通じてほぼ2割台で大きな変化がない。ただし、「スポーツ系」と同じで中学生では一貫して利用する割合は1割程度まで下がる（表3-4-2）。

表3-4-3は現在利用している18種類の塾や習い事の経年変化をみたものである。98年調査から07年調査までの変化をみると、「楽器」が5.2ポイント減少した。その他、若干であるが、「音楽教室」「絵画教室や造形教室」「習字」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「補習塾」が減少している。増加したのは「スポーツクラブ・体操教室」「受験のための塾」「その他」である。

表3-4-3 現在利用している塾や習い事（経年比較）

	(%)		
	1998年 (4,475)	2002年 (4,896)	2007年 (5,315)
スイミングスクール	10.2	11.6	10.0
スポーツクラブ・体操教室	5.1	7.3	7.6
地域のスポーツチーム	9.1	12.5	11.9
バレエ・リトミック	2.3	2.2	2.6
楽器	18.6	16.0	13.4
音楽教室	3.8	3.6	2.9
絵画教室や造形教室	1.9	1.5	1.1
習字	11.7	9.9	8.3
そろばん	3.8	2.6	2.7
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	1.3	2.0	1.3
英会話などの語学教室や個人レッスン	11.7	12.1	9.6
計算・書きとりなどのプリント教材教室	6.3	5.8	5.0
受験のための塾	18.4	19.3	19.9
補習塾	13.3	11.7	11.3
家庭教師	3.3	3.8	1.9
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	0.1	0.2	0.2
定期的に教材が届く通信教育	21.6	19.5	20.6
その他	4.0	4.3	4.9

注1) 複数回答。

注2) 小3～中3生の数値。

注3) () 内はサンプル数。

(2) これまでの経験率

塾や習い事の経験率は小1生で90.9%とすでに9割を超え、小学校中学年で飽和点に達している。中学受験希望と経験率の関係ではすべてのタイプの習い事の経験率が、受験を「させる」ほうが「させない」よりも高い。

次に、「現在利用している」ではなく、これまでに「経験したことがある」塾や習い事についての結果を検討する。

● 小1生で90.9%とすでに9割を超える経験率になっている

表3-4-4で学年別にこれまでの塾や習い事を経験した割合をみると、いずれの学年でも当然、現在利用している割合(表3-4-1参照)よりも高い値になっている。塾や習い事の経験率は、小1生で90.9%とすでに9割を超え、小3生(93.9%)、小4生(94.5%)ごろに飽和点に達していることがわかる。塾や習い事デビューは小学校中学年くらいまでにはほぼ終わるようだ。そしておよそ5%の子どもは塾や習い事をまったく経験せずに中3生に至っている。

● 4分の3の子どもがいずれかの学年で「スポーツ系」の習い事を経験している

同じ表で、タイプ別に経験率をみると、「スポーツ系」の習い事は小1生で68.5%と7割弱が経験している。すでにみた表3-4-2で小1生の現時点での「スポーツ系」の利用率は52.1%であり、小1生の時点ですでに少なくとも16.4%の子どもは「スポーツ系」の習い事を経験し、やめているといえる。なお、「スポーツ系」は、小4生、小5生で経験率はほぼ飽和点に達している。中3生の経験率をみると74.5%であり、小・中学生の間に4分の3の子どもがいずれかの学年で「スポーツ系」の習い事を経験している。

● 10人のうち、およそ9人までがいずれかの学年で「学習系」を経験する

つづいて同じ表で、「学習系」の習い事を

みると、小1生の経験率が58.2%で約6割。「スポーツ系」と同様に、表3-4-2の現在の利用率と比べると、小1生は40.0%である。したがって、少なくとも18.2%の子どもが「学習系」の習い事を経験したが、現在はしていないことがわかる。経験率はこのあと増え続けて、最終的に中3生で89.1%となる。首都圏の子どもの10人のうち、およそ9人までが中3生までにいずれかの学年で「学習系」を経験する。

最後に「芸術系」をみると、小1生は40.1%の経験率である。同じく表3-4-2で現時点の利用率をみると27.3%なので、12.8%以上の小1生がそれまでにすでに「芸術系」の習い事を経験したが、現在はしていないことがわかる。「芸術系」の経験率は小6生に48.3%でピークとなる。

● 中学受験を「させる」家庭は「させない」家庭よりも「学習系」「スポーツ系」「芸術系」すべての経験率が高い

次に、視点を変えて表3-4-5で中学受験勉強が塾や習い事の経験率に与える影響をみてみよう。

この表では、中学受験希望が明確になる小5生と小6生を分析の対象にしている。また、分析の煩雑さを避けるため中学受験を「まだ決めていない」は表には示すが分析の対象からは省く。

予想どおり、受験を「させる」家庭は「させない」家庭よりも「学習系」の塾や習い事を経験させている割合が高い(受験を「させる」97.1%、「させない」65.7%)。これは、進学塾への通塾が影響しているものと考えられる。

しかし、予想外なことだが、同じ表3-4-

5で「スポーツ系」「芸術系」でも受験をする子どものほうが受験をしない子どもよりも経験率が高い。「スポーツ系」は受験を「させる」(86.2%) ほうが「させない」(73.5%) よりも経験率が12.7ポイント高い。「芸術系」も受験を「させる」(68.6%) ほうが「させな

い」(38.1%) よりも経験率が30ポイント以上高くなっている。塾や習い事の利用については、受験をさせる母親はそうでない母親よりも、「学習系」だけでなく「スポーツ系」「芸術系」の3つのタイプすべてで高い経験率になっている。

表3-4-4 塾や習い事のタイプ別経験率（学年別）

	(%)								
	小1生 (728)	小2生 (709)	小3生 (659)	小4生 (580)	小5生 (475)	小6生 (474)	中1生 (1,094)	中2生 (1,000)	中3生 (1,033)
塾や習い事の経験率	90.9	90.6	93.9	94.5	93.3	94.1	94.1	92.7	94.9
スポーツ系	68.5	71.5	76.9	78.1	79.2	75.3	74.0	73.7	74.5
学習系	58.2	58.1	66.8	70.2	75.2	75.1	81.7	83.3	89.1
芸術系	40.1	40.2	42.6	42.2	43.2	48.3	46.5	43.9	45.8

注1) 複数回答。18項目からあてはまるものを選択。

注2) 「塾や習い事の経験率」は「今までに学校以外の塾や習い事、スポーツクラブ、通信教育・教材などを利用したことがありますか」という質問に対して「はい」と回答した割合である。

注3) 学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親も含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注4) 塾や習い事のタイプの分類は表3-4-2と同様。

注5) () 内はサンプル数。

表3-4-5 塾や習い事のタイプ別経験率（中学受験希望別）

	(%)		
	させる (239)	させない (577)	まだ決めていない (112)
スポーツ系	86.2	73.5	83.0
学習系	97.1	65.7	82.1
芸術系	68.6	38.1	42.0

注1) 複数回答。18項目からあてはまるものを選択。

注2) 「お子様に中学受験をさせますか」の質問に対する回答別に集計。

注3) 小5～小6生の数値。

注4) 塾や習い事のタイプの分類は表3-4-2と同様。

注5) () 内はサンプル数。

(3) 習わせてよかったもの

もっともさせてよかった塾や習い事は、男子の母親では「スポーツ系」の習い事が37.3%。一方、女子の母親は「芸術系」が18.9%である。学年段階別には、「スポーツ系」は小学生の低、中、高のすべての学年段階でおよそ3割の高い評価を得ているが、中学生ではやや下がる。

これまでみてきたように、母親は、子どもにたくさんの、そして多様なタイプの塾や習い事をさせている。それでは、それらの塾や習い事のなかでもっともさせてよかったと思っているのはどのようなものだろうか。なお習い事のタイプの分類はこれまで図表で使用してきたものと同様である。

● 習わせてよかったとされるのは「スポーツ系」の習い事である

表3-4-6は、18種類の塾や習い事のなかで、もっともさせてよかったと思うもの1

つを選択した結果である。

まず、「全体」のタイプごとの集計をみると、「スポーツ系」合計が29.0%と高い値になっている。とくに男子の母親では、37.3%と4割近い選択率になっている。そして女子も20.1%と男子にはおよばないが、高い評価である。つづいて、「学習系」合計が11.7%、「芸術系」合計が11.2%とほぼ同じ割合で続いている。「芸術系」を選んでいる割合は、男子の母親の4.3%に対して女子の母親は18.9%と高くなっている。

個々の塾や習い事について詳しくみてる

表3-4-6 もっともさせてよかったと思う塾や習い事（全体・性別）

	(%)		
	全体 (6,313)	男子 (3,275)	女子 (3,003)
スイミングスクール	13.9	14.9	12.8
スポーツクラブ・体操教室	5.2	5.8	4.6
地域のスポーツチーム	9.9	16.6	2.7
「スポーツ系」合計	29.0	37.3	20.1
バレエ・リトミック	1.7	0.0	3.6
楽器	6.7	2.6	11.1
音楽教室	2.0	1.1	3.1
絵画教室や造形教室	0.8	0.6	1.1
「芸術系」合計	11.2	4.3	18.9
計算・書きとりなどのプリント教材教室	2.9	2.8	3.0
受験のための塾	4.1	4.8	3.3
補習塾	1.4	1.7	1.2
家庭教師	0.3	0.4	0.3
定期的に教材が届く通信教育	3.0	2.7	3.3
「学習系」合計	11.7	12.4	11.1
習字	3.2	1.9	4.7
そろばん	1.7	1.7	1.6
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	0.7	0.6	0.8
英会話などの語学教室や個人レッスン	3.3	3.0	3.7
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	0.7	0.8	0.5
その他	2.6	3.1	2.2
無答不明	35.7	34.9	36.5

注1) 18項目から1つ選択。

注2) 「今までに学校以外の塾や習い事、スポーツクラブ、通信教育・教材などを利用したことがありますか」という質問に対し、「はい」の回答のみを母数として集計した。

注3) は「スポーツ系」の習い事、 は「芸術系」の習い事、 は「学習系」の習い事を示す。

注4) 「全体」には性別が不明の者も含まれる。

注5) () 内はサンプル数。

と、男子のベスト・スリーは「地域のスポーツチーム」の16.6%がもっとも高く、つづいて「スイミングスクール」が14.9%、「スポーツクラブ・体操教室」が5.8%といずれも「スポーツ系」となっている。女子のベスト・スリーは「スイミングスクール」が12.8%、「楽器」が11.1%、「習字」が4.7%となっており、男子の場合と比べてベスト・スリーが多様なジャンルに分かれていることが特徴である。

「スポーツ系」は小学生のすべての学年段階で高い評価を得ている

つづいて表3-4-7で、学年段階別にもっともさせてよかったと思う塾や習い事をみてみよう。まず、習い事のタイプ別では「スポーツ系」合計が小学校低学年(31.5%)、中学年(32.3%)、高学年(29.7%)と小学生のすべての学年段階でおよそ3割と高い値にな

っている。しかし、中学生では26.6%とやや下がる。

同じ表で「芸術系」合計をみると、小学校低学年(11.1%)から中学生(11.0%)まで、すべての学年段階で1割程度で安定している。これに対して「学習系」合計は小学生ではいずれの学年段階も1割弱であったのが、中学生では14.2%と評価が高くなる。

最後に個々の塾や習い事に着目すると、「スイミングスクール」が小学校低学年(17.9%)、中学年(16.4%)で高く評価され、「地域のスポーツチーム」が小学校中学年(10.2%)、高学年(13.0%)で高く評価されている。さらに、「楽器」もすべての学年段階でおよそ5~7%程度の割合となっている。「受験のための塾」は小学生ではいずれの学年段階でも評価が低く、中学生で評価が高くなる。

表3-4-7 もっともさせてよかったと思う塾や習い事(学年段階別)

	小学校低学年 (1,304)	小学校中学年 (1,167)	小学校高学年 (889)	中学生 (2,937)
スイミングスクール	17.9	16.4	9.7	12.5
スポーツクラブ・体操教室	7.8	5.7	7.0	3.3
地域のスポーツチーム	5.8	10.2	13.0	10.8
「スポーツ系」合計	31.5	32.3	29.7	26.6
バレエ・リトミック	2.6	1.9	1.5	1.4
楽器	5.1	6.9	7.2	7.1
音楽教室	2.6	1.7	2.2	1.8
絵画教室や造形教室	0.8	1.1	0.9	0.7
「芸術系」合計	11.1	11.6	11.8	11.0
計算・書きとりなどのプリント教材教室	3.5	4.0	2.1	2.4
受験のための塾	1.0	1.4	2.8	7.0
補習塾	0.0	0.7	0.9	2.6
家庭教師	0.2	0.1	0.7	0.4
定期的に教材が届く通信教育	5.0	3.4	3.1	1.8
「学習系」合計	9.7	9.6	9.6	14.2
習字	2.9	3.9	3.1	3.2
そろばん	1.0	1.4	2.5	1.9
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	1.0	0.5	0.4	0.8
英会話などの語学教室や個人レッスン	3.4	2.6	2.8	3.7
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	1.1	1.0	0.2	0.5
その他	3.1	2.6	2.6	2.5
無答不明	35.2	34.6	37.1	35.8

注1) 18項目から1つ選択。

注2) 「今までに学校以外の塾や習い事、スポーツクラブ、通信教育・教材などを利用したことがありますか」という質問に対し、「はい」の回答のみを母数として集計した。

注3) は「スポーツ系」の習い事、は「芸術系」の習い事、は「学習系」の習い事を示す。

注4) ()内はサンプル数。

中学生では2万円以上の教育費支出が42.3%と4割を超えている。「4万円以上」は小6生が20.0%、中3生が19.9%である。教育格差の視点からは中学生で教育費支出の格差がやや拡大している。性別では女子のほうが教育費支出が多い。

前節でみたように、今回の調査では73.3%が調査時点で塾や習い事を利用している（表3-4-1参照）。複数利用している割合も低くなく、教育費もかかることが予想される。表3-5-1は1か月にかかる教育費をたずねた結果を経年で比較したものである。

● 中学生では1か月の教育費が2万円以上の家庭は4割を超える

最初に、07年調査の小学生からみると、「1万円未満」が37.8%、「1万円以上2万円未満」が28.7%、「2万円以上4万円未満」が18.3%、「4万円以上」が11.7%となっている。「2万円以上4万円未満」と「4万円以上」の合計は30.0%で、およそ3分の1の小学生家庭が2万円以上の教育費の支出をしている。つづいて07年調査の中学生では、「1万円未満」が36.5%、「1万円以上2万円未満」が15.9%、「2万円以上4万円未満」が31.2%、「4万円以上」が11.1%となっている。「2万円以上4万円未満」と「4万円以上」の合計は42.3%となり4割を超える。

● 中学生で教育費支出の格差がやや拡大している

近年、教育格差が問題となっているが、表3-5-1で98年調査からの9年間の変化をみると、小学生、中学生ともに「4万円以上」がやや増加した。一方、小学生では「1万円未満」が減少したのに対し、中学生ではやや増加した。教育費支出の格差傾向は小学生と比べ、中学生でより顕著であるといえる。

● 女子のほうが教育費支出が多い

次に、図3-5-1は、07年調査の小1生から中3生の全体と、性別に教育費支出の様子をまとめたものである。男子は「1万円未満」が41.9%、「4万円以上」が9.2%である。これに対して女子は「1万円未満」が36.8%、「4万円以上」が10.4%である。女子のほうが教育費支出が多いことがわかる。

● 「4万円以上」は小6生が20.0%、中3生が19.9%である

最後に、表3-5-2は子どもの学年別に教育費支出をみたものである。

小1生では「1万円未満」が49.0%で半数近くを占めている。つづいて、「1万円以上2万円未満」が32.4%、これに対して「2万円以上4万円未満」は13.2%、「4万円以上」は3.2%であった。しかし、学年が上がるにつれて、教育費の支出は徐々に多くなる。小6生では、「1万円未満」は33.1%まで減少し、「1万円以上2万円未満」も26.4%まで減少する。これに対して「2万円以上4万円未満」は16.0%、「4万円以上」は20.0%と増加する。「2万円以上4万円未満」と「4万円以上」の合計は小1生が16.4%に対して、小6生では36.0%とおおよそ20ポイントの増加となっている。これは中学受験の影響が大きいものと思われる。

中学生については、中1生で教育費の支出が減り、中3生になると、「1万円未満」が22.8%、「1万円以上2万円未満」が11.6%、「2万円以上4万円未満」が39.9%、「4万円以上」が19.9%と再び高額になっている。「2万円以上4万円未満」と「4万円以上」の合計は59.8%である。

表3-5-1 1か月にかかる教育費（経年比較 学校段階別）

	小学生			中学生		
	1998年 (2,130)	2002年 (2,392)	2007年 (2,188)	1998年 (2,328)	2002年 (2,504)	2007年 (3,127)
1万円未満	41.9	41.6	37.8	31.2	34.3	36.5
1万円以上2万円未満	29.5	29.1	28.7	18.5	16.7	15.9
2万円以上4万円未満	16.5	15.2	18.3	35.8	34.7	31.2
4万円以上	8.9	9.4	11.7	9.1	8.9	11.1
無答不明	3.3	4.7	3.5	5.4	5.4	5.3

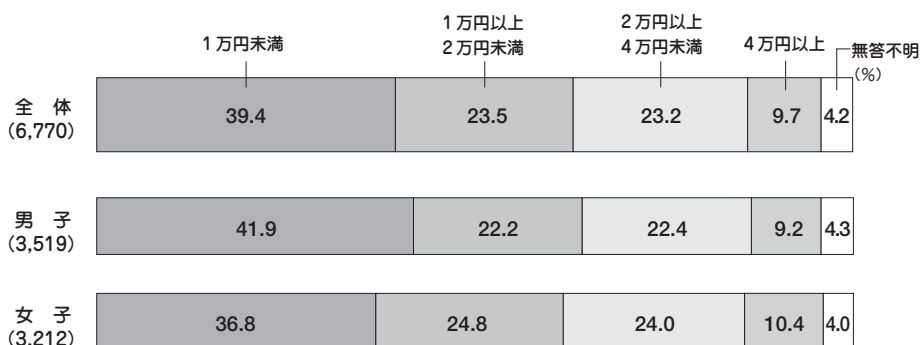
注1) 小学生は小3～小6生、中学生は中1～中3生の数値。

注2) 「1万円未満」は「5,000円未満」+「5,000円～10,000円未満」の%。「1万円以上2万円未満」は「10,000円～15,000円未満」+「15,000円～20,000円未満」の%。「2万円以上4万円未満」は「20,000円～30,000円未満」+「30,000円～40,000円未満」の%。「4万円以上」は「40,000円～50,000円未満」+「50,000円～60,000円未満」+「60,000円以上」の%。

注3) 塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ」と答えた場合は「5,000円未満」とし、「1万円未満」に含まれる。

注4) ()内はサンプル数。

図3-5-1 1か月にかかる教育費（全体・性別）



注1) 「全体」には性別が不明の者も含まれる。

注2) 教育費の金額の分類は表3-5-1と同様。

注3) 塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ」と答えた場合は「5,000円未満」とし、「1万円未満」に含まれる。

注4) ()内はサンプル数。

表3-5-2 1か月にかかる教育費（学年別）

	小1生 (728)	小2生 (709)	小3生 (659)	小4生 (580)	小5生 (475)	小6生 (474)	中1生 (1,094)	中2生 (1,000)	中3生 (1,033)
1万円未満	49.0	47.9	40.9	39.5	36.4	33.1	44.9	41.2	22.8
1万円以上2万円未満	32.4	32.2	32.7	28.3	25.7	26.4	20.0	15.7	11.6
2万円以上4万円未満	13.2	12.5	19.4	20.3	16.6	16.0	24.9	29.3	39.9
4万円以上	3.2	4.7	4.3	8.6	17.5	20.0	5.2	8.6	19.9
無答不明	2.2	2.7	2.7	3.3	3.8	4.4	4.9	5.2	5.9

注1) 教育費の金額の分類は表3-5-1と同様。

注2) 塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ」と答えた場合は「5,000円未満」とし、「1万円未満」に含まれる。

注3) ()内はサンプル数。